

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

体験することこそ本来の「学び」

啓蒙教育の弊害

現在、私達にとって「教育」とは、18世紀の西欧理念を論理的根拠とする「啓蒙主義教育」を意味し、それを当然視している。ヨーロッパ史において、啓蒙主義は、「人間こそが万物の尺度である」との考え方をもとに個人としての人の権利を主張することで、国家からの王権と宗教の分離、市民の反乱と社会変動を正当化するための理論として意義を持った。

こうした啓蒙教育が浸透した社会では、同胞の精神、つまり個人に

は社会的責任もあるという考え方は抵抗を受け、排除もしくは等閑視されている。個人には、他に害を及ぼさないやり方で自己利益を追求する自由があるが、公共善の推進に努め、あるいは社会の便益を高める努力をする義務はない。

例えば、英国で武道を指導する至誠館門人は、「私の稽古に参加する人たちには、指導者である私と人間的に親しくなることには興味がなく、私の知識や技術から自分にとって役立つものを手に入れられさえすればそれで十分だ、と考えている人が多いようだ。かれらに

は、社会的責任感がなく、個人の利益を得ることに集中する競争的スポーツ精神の態度があるように思われる。彼らの姿勢は、日本武道の伝統とも、忠誠心、名誉心、自己犠牲精神の涵養とも全くかけ離れている。」と話す。

日本においても、明治以降、学校教育で啓蒙教育が採用されるようになって「知識による教育」が発達した。この啓蒙教育は、自分自身を独立した絶対的存在としてとらえ、自己利益を追求する自由と権利を教える。また、自分以外の人間や自然などの事象については、自分

とは別の存在として認識し、これらを第三者の立場から観察・分析し、個々の結果から全体を推測して結論とする学習方法を教える。この「自分を外に置いて学ぶ」という手法は、結局は自分がその当事者足り得ないが故に限界があり、あくまでも外観的、推論的な域を出ない。

例えば「歴史を学ぶ」と言う場合には、その歴史の流れを自分自身から切り離し、客観的に過去の事象を時系列で分析・整理する手法が重んじられている。しかし現実的には、我々は同じ歴史の中に生まれ、同じ歴史の一端を担っているのでは

る。科学も同様に、宇宙や自然の外に自分を置いて観測するがごとき態度でいるから本質を誤る。われわれは、宇宙や自然の中に生まれ、その中に生き、その中で死んで行く存在であり、その「外」にいるのではない。

歴史の当事者として渦中に入つて過去・現在・未来を見通せば、過去は現在に集約されていると認識し、現在に生きる自分が未来を担うという自覚を持つことができる。伝統精神の継承とはそういうことである。また、自然との共生とは、自然の一部であるという認識に立ち自然の一員として生きるということである。そのように、すべての

物事に對して、自己を当事者として自覚し参画することが本来の意味での「学び」でなくてはならない。

日本の教育では、「学び」は「知」であると同時に「行(ぎょう)」であった。「武道を学ぶ」「茶道を学ぶ」と言う場合、それは即ち「体験し体得する」ことを指している。また、文章を学習する場合にも書き取りをして頭だけではなく体で学んだのである。体を使って学ぶことで、自己行為の主体たる当事者に置いて学習することができる。「鹿島神流を学ぶ」と言うときには、武甕槌神(たけみかづちのかみ)から続く鹿島神流の歴史の中に身を置いて、自己の鍛錬を通じて得た体験を手が

かりに「自分は如何にあるべきか」ということを学ぶのである。そのとき、自己の内面には言葉にできない「感覚と悟り」が産まれるのである。それに対して知識の学びは、見て聞いた鹿島神流の知識を記録し再生するのみで、浅慮軽薄といわざるを得ない。

例えば、知識としての四季は、春夏秋冬を繰り返すという概念的な捉え方で定義され、その変遷を「四季のサイクル」と表現する。ところが実際に、その中に生きる立場からすると、四季は「サイクル」ではなく「スパイラル」である。1年の時を経た今年の春は、草木と共に自然の一員たる自分も成長しているのであつて、決して去年の春に戻るわけではない。

本来の自然全体としての成長を、個々の生存競争と捉えるのが、ダーウインの進化論『自然選択の方途』による、すなわち生存競争において有利なレースの存続を繰り返すことによる、種の起源だ。この理論では、限られた資源をめぐる争いが起こることを前提に、ハーバード・スペンサーと同じ『適者生存』という言葉を作り出し、結果として、遺伝

的に劣るとされる人々をふるいにかけるという民族浄化につながつた。現在の自由競争社会もまた、優越した遺伝子を持つ競争の勝者のみが生存権を獲得できるという考えが、根底に潜んでいるようだ。このように、自己もまた全体の進化の中に生きていくという当事者意識をはなれ、自己を全体から切り離し、自己を正当化するための推論による理論知識に傾倒すると、不自然な破滅的行動をもたらす。

真の進化論は「地球の自然のバランスと調和に貢献する有機生命体は環境に順応し進化しそうでないものは滅びる」ということが明らかにされている。1%の人が、99%を犠牲にして生き残つても、結局その人を含めた全体が全滅することになるのだ。

物質としての生命体が、原核生物(単細胞)から真核生物(多細胞の結合体)そして多くの細胞が共同して役割分担をする有機生命体へと変化したように、個々は結合し共同する方向性こそが進化の道筋である。自然との一体的共存、人類の共同化すなわち共助社会こそが唯一人類が進化成長し続ける道で



あろう。絆や思いやりという言葉に代表される日本の社会は、人類の中でも相当に進化した社会形態であり、その中にいる人間自体もかなり進化していると言えるのではないか。

弱肉強食によって物事は進化しているという単純で直線的な考え方は、自己を独立した主体とし他の存在を自分の外のものとする啓蒙教育のもたらした弊害である。自然の法理では、決して優越した遺伝子を持つ強者だけが進化を遂げ、そうでないものは滅びていくのではなく、自然の環境に適合したものが生き残ることが証明されている。強くても環境に適合できなかった生物は絶滅してしまうのである。自分を自然の中の一当事者として学び、考え、行動すれば、このような過ちは犯さない。

集团的学びが共助社会を育む

正しい「学び」とは、自然の中で、そして社会の中で、物事を「体験し体得し体顕する」というプロセスを繰り返すことである。人間の行動は、常に成功と失敗の両面を内包

しており、それを知恵として身につけるには、なにより体験することが一番である。それが自然の道理に適った学びの正しい方向性だ。

国家にとつての体験は、自国の歴史と伝統であり、そこから「学ぶ」ことが着実な進化に結びつくはずである。ところが啓蒙教育を正しいとして疑われないがゆえに、経験に依らない論理的合理性（しかも他国の歴史）に頼って自国の方向性を決めようとするところに社会的な危うさが見える。そのような推論的政策が進められる行政は、社会の現実を見ることなく、意図的推論で社会の実情までを評価してしまうために、現実と虚構の区別が付かなくなってしまう。

人類は、個々が協力し合う社会集団にまで進化を果たしてきた。にもかかわらず、その社会を解体し個人の競争を原理とする価値観を世界に適応させようとするのは、地球のまた人類の歴史に逆行することだ。まるで有機体生物が単細胞にご先祖帰りをすることを正しいと言うに等しいほどばかげた考えである。

個人としての人間を進化の頂点

と考え、個人を主体とした教育を施すのはもうやめたほうがよい。集団化という進化を遂げたわれわれには、集团的学びこそが必要なのである。自然や共助社会をフィールドにして集団で経験し、集団で考え、集団で行動する。そういう教育こそが、人を育む正しいプロセスだ。

個人の教育では、個人能力に関する単一の評価基準を全体に当てはめることになる。結果としてある種の人間だけが優秀とされ、その基準に該当しなかったものは凡人あるいは劣等者とみなされる。しかし、自然界に存在する以上、無価値な存在などあるはずがない。一人ひとり果たすべき場所と役割があるはずだ。

集団で学ぶということは、一つのサッカーボールに全員がエース・ストライカーとして群がることではなく、チームとして戦術を組み立てポジションを割り振りし、一人ひとりが全体に寄与できるように最善のシステムを創造することだ。そして何より、全員が心をつなげて一体となつて考え行動する共同体としての体験を重ねることだ。

日本人の強さは、個人個人の能

力以上に集団化したときに発揮される力にある。他者を犠牲にするのではなくお互いに助け合いながら粘り強く諦めない思いやりの力。一時的（契約的）に集団化するのではなく、助け合いによって生まれた絆を大切にし、過去の人々に感謝し一体化する伝統力の強さ。自然や未来の子供たちのことも含めて考える戦略的視点。よりよい世界を創るために一人ひとりができることを為し、統一的な力を発揮しようという一体的集団力こそが日本の力である。

日本の建国において、神武天皇が『八紘為宇・天の下をおおいて宇（い）え」と為（せ）む』の率先垂範を誓い、国民（おおみたから）がそれに習って実践することを呼びかけられた意義は深遠である。『八紘一宇』では教義的で国民の主体性を喚起しにくく、神から示されたドグマになつてしまうかもしれない。しかし、国が（世界が）一家のように助け合いながら幸福になることを祈念しつつ、「今できることを為そう」という呼びかけは、国民一人ひとりとつて自ら主体的に取り組むべき務めが明確で無理がなく、よ

りよい社会の成長を自然に着実に促してくれる。このような、集団の中の実践的教育こそが理想的「学び」と言えるのではないか。

武士道精神が、海外の人々から最も崇高なる理念と評価され、高貴なものとして尊ばれている最大の理由は「自己犠牲」の精神である。

武道における「自己犠牲」や「弱きを助け強きを挫く」という精神のベースには、「世のため人のため力を尽くす」ことを善とする共助の社会的モラルがある。これなくして武士道の社会的価値は認められなかったであろう。逆に言えば、日本人が社会的共助の精神価値を育んできたからこそ、武士道は形成されたのであろう。

ロシア人門人は武道について次のように記している。「私にとって武士道とは、人間としての原点に戻るということだと解釈しています。そこでは、人々の心と精神と肉体は調和し、誠実に道徳的な行動をすることができません。日々、他人の利益のために自己を犠牲にすること。この高潔な精神こそが武士道だと思のです。」

スイス人門人は「私たちは皆、恩恵を与えてくれた過去の人々に借りがあり、その借りを次世代に返す役割があります。残念ながらその役割は、個人主義的な現代社会では、ほとんど忘れ去られてしまっています。日本の社会ではまだしっかりと息づいています。食事の前に『いただきます』と感謝の言葉を忘れない日本人の暮らしの至る所に、「感謝の心」が隠れているのを感じました。「感謝の心」は武道の中核にある価値観でもあります。この「感謝の心」は、どの文化でも大切できるはずですし、この価値観を共有することで互いを理解するきっかけが掴めるのです」と言ってくれた。当事者たる日本人が自覚できているかどうかは別にして、まだ、日本人は修理固成の文化再生力をしっかりと保持しているということだ。

経験なき知識だけで 国の方向性を決めるな

「敵を知り己を知らば百戦殆うからず」という孫子の言葉は、一般には優れた戦略論と言われている

が、武道では「敵をも自分のことのように思う」と、さらに進化した高度な戦略論に立つ。敵の心が自分の心のように思えるが故に、敵との共生までも見据えた戦略を立てることができるとだ。

このように日本の文化は相当な進化の過程を遂げてきた。にもかかわらず、現在の日本は、自らの文化が持つ歴史的価値観を自覚することなく、原始動物のような競争原理に国家と国民の命を委ねようとしているように見える。

安全保障では、ひとつの国体が、3千年にも届こうかと言う長い歴史を生き抜いてきたにもかかわらず、近代以降にできた子供のような歴史の国の安全保障政策に国家の運命を完全依存している。経済では、百年以上の歴史を持つ企業経営者がたくさんいるのに、その意見を聞かず、国家を巧みに利用しようとする成り上がりの経営者の意見に経済を翻弄されている。国家の運営には、先祖から引き継いだ責任を果たそうと体を使って働く「学び」の多い国民の意見は軽んぜられ、啓蒙教育の申し子のような理屈の達者な官僚や学識者の意見

が反映される。

日本の「学ぶ」と啓蒙教育の「知る」の本質的違いを再確認することは、社会全体を考える上で極めて重要な事項である。特に国家の指導的立場にある者は、自らが歴史的生命体である日本国家運営の責任ある当事者であると自覚して、先祖に申し訳の立つよう「歴史伝統に学ぶ」姿勢に立ち返ることが望まれる。

